イスラームとナショナリズム――徴候としての現代中国――

鈴木　規夫
（愛知大学）

イスラームとナショナリズムをめぐる言説は、時代状況に応じてさまざまな意匠をもって立ち現れてきた。それはネイションの定義が含む「規模」の認識の曖昧さのもたらすものである。なぜ、この「規模」の問題が生じるのかといえば、ネイションを構成するためには「文化」ファクターが大きな位置を占めているからに他ならない。かつてアンダーソンが、明らかにマクルーハンに刺激されて、ナショナリズムと出版資本や新聞メディアとの関係に着目したように、この「文化」ファクターはメディアの拡張と状況とに応じて、「想像的」に伸縮自在なのである。それゆえに、「遠隔地ナショナリズム」といった現象も容易に造り出されうる。

この「文化」ファクターの変化に応じ、例えば、19 世紀欧米列強帝国主義拡張の重要な文化的基盤として「クリスティアン・ネイションズ」という集合概念が生み出されたのに対して、イスラームにおけるウンマ概念を「ネイション」と翻訳するような事態も生じた。この相関関係は実に興味深く、ハンティントンのいう「文明の衝突」が、実は「想像力の衝突」に他ならいないことを端的に物語っている。むろん、「西洋文明」が「異質な他者の文明」への「想像力」をもはやもたないのであれば（もっとも、そうした「西欧の没落」表明がなされてから、すでに一世紀近くも経過しているという事実も考慮しておくべきだが）、また、「非西洋文明」が相手を帝国主義者と罵ることだけに終始するのであれば、それはすでにそれぞれの「敗北」を表明しているにすぎない。

現代世界において、イスラームとともに「中国」という記号もまた、ナショナリズムにおける「文化」ファクターを考察する上で避けて通れない対象である。それは、ヨーロッパが自己理解の道具として作り出したネイション概念において予定されていた「規模」の認識を、〈イスラーム現象〉同様に容易に裏切っているからに他ならない*。

現代中国を示す「12 億人のネイション」という表現は、ナショナリズムの原義からすれば、ほとんど何も意味していないに等しい。もともと「華人を中心とする国」という、清朝支配との対抗上成立した「中国」という記号が、55＋1 の多民族を有機的に複合統合した「一つの国家」を示すものになったのであるとすれば、そこには「日本人は単一民族である」といった単純なフィクションより巨大で複雑なフィクションが必要となるに違いない。その複雑性を吸収し不断に「中国」を再構築していくために欠くことができないものが、「想像的」に伸縮自在な「文化」ファクターなのである。

* アンダーソン『想像の共同体』の漢訳は中国のナショナリズムを扱った章を丸ごと削除しているが、現代中国ナショナリズムを考える上で、この扱い自体をめぐる分析も必要不可欠であろう。

現代中国において「反日」という政治指標の機能と役割は、もちろん一義的には政権内部の権力闘争の一環としての意味を考えるべきであることは言うまでもない。だがそれ以上に、インターネット・メディア空間に「反日」が浸潤拡張している現象は、それが「中国」という記号の凝集性を高めるための一つの文化装置として有効であることをよく示している。55 の「少数民族」についても同様である。「反日」や「少数民族」などの文化装置が存在しなければ、「中国」という記号もメルトダウンしてしまう可能性があり、その一方で、例えば、歴史学的想像力が創出したかつての朝貢貿易関係における中華帝国イメージのように、内モンゴル自治区モンゴル族や東北部朝鮮族などに中国人アイデンティティを形成させていくように、「日本」をも「中国」を構成する「少数民族」の一つとしてしまう「想像的」拡張可能性もそこには秘められているといえよう。

そうした可能性の問題として、現代中国における「回族」の存在を考えていくことは、現代世界におけるイスラーム現象を探る上でも非常に大きな補助線となるに違いない。それは、歴史的には中国共産党の初期民族政策の形成過程に関わる問題であり、現実的には「回族」なのか「回民」なのかといった問題やその定義をめぐる問題なども関わる問題である。これをめぐってはすでにさまざまな議論が生まれているが、そうした議論の構成方法それ自体には、現代世界に拡がるさまざまな地域のムスリム・コミュニティーにおけるアイデンティティ問題と交錯していく側面が多々あるのではないか。

この点で現在私が着目しているのは、タリーク・ラマダンの主張するような〈ヨーロピアン・ムスリム〉といった新たなアイデンティティ形成をめぐる試みの存在である。規模の問題として「中国」が EU と同じように(もっとも、EU は非西欧世界との対照性に担保されているものにしかすぎないのであるが……)、拡張された一種の多様な文化統合共同体指標としての役割を果たしうるのであれば、現代中国における「回民」や「回族」のあり方は、近い将来の EU における〈ヨーロッパ・ムスリム〉のあり様を示す、有力な徴候となりうるかもしれない。むろん、かつて日本の被差別部落民との比較対照において中国における回民・回族問題を議論する事例もあったように、そこには漢人社会からの「被差別」的文化指標としてのマイナスのファクターも残存していくはずであり、その点を看過すべきではない。だがその一方で、ムスリム・アイデンティティを地上の共同体において担保する新たな手がかりとなっていくという意味では、現代世界のさまざまな地域のムスリムにとって示唆するものは多い。

ナショナリズムをめぐる文化の一般理論を考えるに際しても、現代中国における回民・回族問題への着目は、きわめて重要なものである。それは「定義することのできない集合表象の複数性」と、その集合表象が含む「かれらではなく選ばれた人々であるわれらの唯一性」とをめぐるネイションの複合的な性格が、ナショナリズムをめぐる議論の根幹にあり、それはまたさまざまカタチを帯びて繰り返される存在認識論上の〈一と多〉をめぐる問題に他ならないからである。(すずきのりお：愛知大学大学院国際コミュニケーション研究科教授)